
就活であった面接の話

4 & 4 K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

就活であつた面接の話

【Nコード】

N8605E

【作者名】

4&4K

【あらすじ】

僕が就活中に実際に体験した面接のお話です。どうぞ馬鹿にしながら読んでください。

(前書き)

むしゃくしゃして書いた。今は反省している。

企業によつては、ときどき突飛な質問を出してくる所がある。

大抵はその人の志望動機、自己PR、企業に対しての質問といった、予め予測しやすい問題が多い。だが、イジワルな面接官なのかそれとも企業がそういった趣向なのかは定かではないが、ギャグじやないかと思える質問をしてるところも本当にあるのだ。

時には脱線したまま面接を終えることもある。……選考を忘れさせる話術は大切なものだと言感する。

私は45分の個人面接で90分使つて話し込んでしまい、なぜか人事の人に注意されたことがある。さすがにお互い様だと思つたのか、注意されたとき相手も笑顔だったが、質問事項が半分終わらなかつたと苦笑された。

ちなみに、その面接は通過できた。

「もしもあなたの家にドラ もんが来たとしたら、何の道具を使つてみたいですか？」

いきなり何を言い出すんだ、このおじさんは……！

圧迫面接（面接官がこちらを中傷するような発言や態度を取る面接方法）の次に受けた面接だったので、ビクビクしながら受けた面接の質問がこれだった。

その前に志望動機とアルバイト経験を聞かれたのだが、まさか表情一つ変えずにこの質問が来るとは思わなかつたので、私の意識は二次元に飛んだ。

しかしこの質問は、常々私が「あつたらいいな」と思つていたことだったので、おそらく誰よりも早く答えを導き出せたはずだ。

「『もしもボックス』です」

「……と、その道具で何をしたいですか？」

もしもボックスを知らないような雰囲気だった。

おそらく、面接官の中では『どこでもドア』や『タケコプター』といったメジャーなものが思い浮かんでいたはずだ。『もしもボックス』と答えた学生は、おそらく私だけなのだろう。

「もしも」だったら、というとそれが本当になる機械なので、なんでもできます！」

落ちた。

集団面接にて、こんな人がいた。

「大学生活で、勉強以外で励んだことはなんですか？」

という質問に対し、堂々と「勉強です」と答えたW大の生徒。まあ、W大に行くくらいだ、相当頑張ったんだろう……だが、ここは嘘でも部活なりアルバイトなり趣味なりにしておかないと、印象が悪いんじゃないだろうか。

彼は背筋をぴっと伸ばし、優等生の雰囲気前面に出して、

「私は、大学では勉強に専念しようと思っていたので、サークルにもアルバイトにも手を出しませんでした。大学では自発的に資格取得や勉強に取り組み（以下略）」

私は彼の履歴書を見ていないので、それが本当なのかはまったくわからないが、学生の見本のような回答をしていた。

しかし面接官の若い女性は、笑顔でその答えに対して切り返してくる。

「では、勉強のストレス発散方法はなんですか？」

今まで流暢だったのに、彼は黙った。

少しして歯切れ悪く、

「……目標があるうちは……勉強が苦痛とは思いませんでしたので

……」

小さいころからスパルタ教育でも受けてきたのだろうか。

簡単に受け流せそうな質問なのに答えが思いつかなかった彼を見て、私は真面目すぎるのも考え物だと思った。

というか、W大の生徒がなんでここを受けるんだろう……知名度はあるけど、ここはブラック企業認定されているのに。

文系なのにIT企業を受けたこともある。

そこは離職者が少ないのが自慢らしいので、どんなに雰囲気の良い会社なのだろうと思って覗いてみたのだ。

説明会で先輩社員の男女（同じチームらしい）が、いろいろな質問に答えてくれている中で、こんな質問があった。

「残業時間はどれくらいですか？」

正直に言おう。この質問をするのは結構勇気がいる。

誰もが気になるのだが、印象が悪くなる気がして避けているのが大半だ。

もっとも、卒業した先輩曰く、人事の言うことなんて半分は嘘だと思っていないと、入社したときに馬鹿を見ることになるので、信じてはいけならしい。

ネットでも『残業はありません』残業と認めませんが働きなさい』の法則が挙げられているし、私もバイト先で経費削減とか言って残業代が出なくなった社員の方々が苦勞しているのを見ている（店は増え続けているのにね）。

さらに言えば、月休八日とか言っているアルバイト先の正社員募集要項だが、休みは週一日である。

うちには全部落ちたとき以外来るな、と元社員のおばさんから助言を貰ったくらいだ。

さて、残業時間について尋ねられた二人の社員だが、どうやら人

事の根回しが足りなかったようである。

二人とも残業はある、と正直に答えてくれた。そこまではいい。女性の方は笑顔で、

「私は八時には会社を出ますね」

というのに対し、男性の方は、

「忙しい時期ですと終電か、徹夜もありますよ。たまにですけど」
男女の雇用差はネットだけではなく、真実のようだ。

そして別のIT企業にも突撃した。

その会社は資料を配布したくせに、椅子だけで机がないという説明会を開いてくれた大変ありがたい会社である（大手）。

しかもアンケート記入とかふざけるなといった。机出せ！みんな四苦八苦して膝の上で腕を動かし、字がヨレヨレになっているのは仕方ないだろう。

バッグの中に入れっぱなしの『まぶほ』下敷きを使う勇氣はさすがにない。

あまりやる気がなかったのだが、性格適正や筆記試験になぜか通ってしまい、二次面接（実質三次選考）までできてしまった私は、前のIT企業で感じた男女の残業時間の違いを尋ねてみることにした。
「うちは基本的に男女平等だよ」

と、人事の方は笑顔で答えた。だが……。

「でも、帰りが遅くなることがわかつている場合は、女性だけ帰すね」

……それって平等じゃないですか？ とつい口から出てしまった私の言葉に、人事の方は言い難そうに苦笑する。

「いやあ……女性に問題が起きると、会社としてちよつと……いろいろ物騒だから」

言葉を濁したが、今がブームの『女尊男卑』の影響なのだろう。

ニュースでも帰宅時間が遅くなった男性が襲われるのと女性ที่襲われるの、どちらの扱いが大きいかと聞かれれば当然女性の方なわ

けで、責任追及もされるだろう。

思わず「じゃあ男性だったら問題起きてもいいんですね」と言っ
てしまいそうになったが、寸前で飲み込んだ自分を褒めたい。

私の女性不信度が2上がった。

その選考は通過したが、四次面接（実質五次選考）で落ちた。

約二カ月の長い選考期間であった。

三次面接にて、隣で面接をしていた女の子二人が泣いていたのが、
とても怖かった。

落ちた話ばかりだったので、内定を取れたお話。

私は趣味の欄に『イングランドプレミアリーグ観戦』と書いてい
るのだが、社長がサッカー好きらしく、話が弾んだ。

ちなみに私はリバプールファン。応援歌も歌える。

「プレミアアって言ったらあれか、……アブラモビッチ！」

「チエルシーのオーナーですね」

「カカ（ACミラン所属）が移籍するんだってね」

「え？ いや、初耳ですね……。しないと思いますよ」

「いや、でもニュースで見たよ。移籍金140億って」

「いやいや！ カカは毎年移籍するって騒がれますからしませんよ。
去年一昨年もレアルと合意したとか騒がれましたけど、デマでした
し」

「そっかなあ。140億なら移籍すると思うけどなあ」

「今のミランがカカ手離したら目も当てられませんよ。ロナウジー
ニョとパトが五輪で取られていますからね」

そんな話で大半が潰れ、内定を貰った。

豪華なソファアって座りにくいよ、不思議！

面接を受けていて感じたことがある。

就職課の面接練習がまったく役に立たないことと、聞かれる質問はほとんど台本どおりの物だということだ。

しかし台本を逸れた質問をされたとき、どう返すかが選考に影響してくるのだろう。

もっとも、あまり変な質問をされたことなんてないので、言葉に詰まることはほとんどなかったのだが……。

ただ圧迫面接をされると開き直って言いたい放題言ってしまう癖を、秋までに直そうと思う。

（後書き）

履歴書書き溜めておこう…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8605e/>

就活であった面接の話

2010年10月8日15時54分発行